

# 寿町における韓国人たちの就労構造と社会的ネットワークの展開

—— 個人戦略のなかのエスニック・コミュニティに注目して ——

李 漣 珍

## 1. はじめに

1980年代後半、戦後に新たにつくられた日本人日雇労働者の寄せ場であった横浜の寿町には韓国人出稼ぎ労働者が増加していた。最初の流入者である韓国の済州島人たちは、同郷ネットワークを利用して寿町に移住し就労していた。他地域出身の韓国人の場合とは異なる様相をみせる済州島人たちの移住は、寿町において、済州島人中心のヘゲモニーを形成させていた。韓国の辺境地であるため周縁化され、近代化の過程において差別の歴史を背負ったまま生きてきた済州島人たちは、寿町という場所では、固有の生活世界を形成していたのである。

そこで、本稿は、1980年代後半から、寿町へ韓国（とくに済州島）からの出稼ぎ労働者の流入が進行していく過程において、そのほとんどが「非正規滞在者」<sup>(1)</sup>である彼（女）らが、日本社会と韓国社会との関係のなかで、いかなる実践を繰り広げ、寄せ場という場所と関わってきたのかを社会学的に分析する。

本稿の構成は次の通りである。2章では、先行研究の批判的検討を行ったうえで、「個人戦略によるエスニシティ」という分析視角を提示する。3章では、朝鮮（韓国）の周縁とみなされてきた済州島の人びとの日本への移住過程とそれを支えた歴史的な状況、彼（女）らを取り巻く環境を記述し、4章では、1980年代後半から2000年代における寿町の済州島人たちの個人戦略に焦点をあて、彼（女）らの就労構造を分析する。最後の5章においては、これまでの議論を踏まえたうえで、寿町固有の「移住を支える社会的ネットワーク」を明らかにする。

## 2. 先行研究と分析視角

### (1) 先行研究の状況 —— 美化されるエスニック・コミュニティ

寄せ場「寿町」への済州島人たちの流入過程と生活世界を考察した高（1998）の研究は注目に値する。自らも済州島人である高は、同郷人が大勢住んでいる寿町へ出向き、数年にわたって地道なフィールドワークを行い、彼（女）らの労働状況、生活実態、ネットワークなどを詳細に調査している。

寿町と外国人労働者の接続を済州島人の同郷ネットワークから説明している高

は、個人と個人が深く関わらないことが暗黙の了解として成り立っている寄せ場社会に地縁・血縁ネットワークを頼って登場した済州島人の存在は全く異質なものであったと指摘している（高 1998：112）。

具体的に付言すると、従来の社会学における寄せ場研究の提示する知見とは対照的に、寿町での韓国コミュニティの「可能性」に焦点を当てている。一般に寄せ場は匿名社会と言われ、寄せ場の労働者は、寄せ場から寄せ場へ、寄せ場から飯場へと流動的な生活をし、個人的な経歴について深く聞かないことが寄せ場社会の流儀であり、「寄せ場労働者間の相互作用における『過去に触れない』という規範は、逆説的に、自身と他の寄せ場労働者を同類として認識させる作用」を持ち、その規範は、寄せ場社会において「お互いの『自由さ』が失われ、寄せ場内部に新たな『不自由さ』が成立しないように秩序づけられている」とされる（西澤 1995：112）。それに対して、「済州島人は、来日から在日済州島人という地域・血縁ネットワークを頼り、寿町に入ってからでも地縁・血縁ネットワークを通して就労情報を流し、人を呼びよせ、来日する前から部屋を探し、仕事の情報を確認しておいた。済州島人は、済州島の地縁・血縁ネットワークを寿町に持ち込み、再生するに止まらず、寿町で出会い、結婚、出産などを通して新たな家族を形成し、ネットワークをさらに拡大し、コミュニティ化するに至っていた」（高 1998：113）。

加えて、済州島人は、寄せ場の労働者のように寿町を一般社会と隔離された空間ではなく、家族、親戚、知人が移動し生活している一場所であり、故郷との延長線上にあると認識していると指摘している。韓国人の日本での出稼ぎ活動を、韓国労働者個人レベルでは収入、そして外国での生活経験などを含む複合的な「チャンス」として捉えられており（高 1998：167）、寿町が「チャンス」を与えてくれるリアリティをもつ場所として韓国労働者たちは想定していたと主張する。

また、寿町の済州島人の「群れ」は一緒に仕事をし、仕事以外の場面でも密着した付き合いをするため、寿町の済州島人の「群れ」は寄せ場のなかでは極めて異質なものであった。寿町における仕事の都合により済州島人ネットワークは変化するが、その核となるのは常に地縁・血縁である。済州島人の地縁・血縁ネットワークは、他者を排除する閉鎖的なものではなく、他者への交流と理解を広げる機能をもっていると高は指摘している（高 1998：114-5）。

## （2）分析視角——個人戦略によるエスニシティ

以上で取り上げた高の研究によると、寿町の済州島人コミュニティはエスニシティの共有による共同性を具現化する形として分析されている。その結果、「寿町の韓国コミュニティ」は完結した韓国社会として描かれ、彼らがホスト社会から孤立／疎外されている側面があいまいとなっている。寿町における「韓国コミュニティ」自体が日本労働市場に組み込まれている現実を見逃してしまう

側面は否めない。そして、本稿でとくに強調したいのは、高の研究が、エスニック・コミュニティ内外の個人による実践そして、個人とエスニック・コミュニティとの緊張関係の現実を捨象させる危険性を孕んでいるという点である。

ゆえに、外国人労働者が寿町に集住していたことの社会的な意義を示し、流動している韓国人の動向をみながら、彼らが寿町でいかに行動するのかについて検討することこそ重要であると考えられる。

このような状況を踏まえたうえで、本稿に示唆を与える研究は、方法論的個人主義の立場から脱産業社会におけるエスニシティの特徴の検討を試みた樋口（1999）の論考である。樋口によると、「財の供給者としてのコミュニティの競争力は大きく低下しており、もはや市場や国家には対抗できない。個人にとってのコミュニティは、必要な財を獲得するための選択肢の一つでしかなく、市場や国家に対する依存の高まりに反比例して、エスニック・コミュニティに対する依存が低下する」としており、「エスニック集団への帰属が個人にとって生活上の要件である程度は、ますます弱まっているのである」と述べている（樋口 1999：339）。

樋口も指摘するように、今日コミュニティは個人の選択肢の一つでしかない。にもかかわらず、1980年代後半からの寿町の済州島人たちは、エスニック・コミュニティに依存せざるをえない状況にある。この現状をもって彼らが周縁化されているとみることもできるだろう。しかしながら、本稿で着目するのは、彼らのエスニック・コミュニティへの依存の内実である。結論を先取りするならば、「非正規滞在者」がそのほとんどであった寿町の済州島人たちは、強制送還の危険と隣り合わせという非常に不安定な状況におかれながらも、済州島人のエスニック・コミュニティを生活資源として使いこなしてきたのである。そこには、就労構造をめぐって、個人と、エスニック・コミュニティの間に不断の緊張関係が存在していた。本稿では、この緊張関係を個人戦略という視角から照射する。ここで個人戦略というのは、寿町における済州島人たちが済州島人コミュニティの束縛を甘受しながらも、日々の生活を成り立たせるために、エスニック・コミュニティを利用していく営みである。寿町に韓国人たちが移住してくる背景には、「移住を支える社会的ネットワーク」（樋口 2002：56）が機能していたことは確かである。本稿では、個人戦略という視角を採ることによって、寿町がエスニック・ネットワークをある程度保持したなかで、より自由に就労と生活ができる場所として形成されていく過程を考察する。この作業を通じて、済州島人個人々の営みによってつくりあげられた寿町の「移住を支える社会的ネットワーク」の性格を指摘することになるだろう。

### 3. 済州島人の移住過程

#### (1) 済州島人の渡日をめぐる歴史的経緯——韓国における周縁としての済州島

済州島から日本への移住の歴史は古い。地理学者である榊田によると、済州島の海女は「朝鮮併合」以前から日本で出稼ぎをしていたという（榊田 1976：83）。1914年には、第1次世界大戦勃発による日本工業界の発展に伴って発生した労働力不足を埋めるべく、大阪紡績工場の事務員が職員募集のために済州島を訪れている<sup>(2)</sup>。

そして、大阪—済州島間の定期連絡船の開通は、阪済の距離を時間・空間・身体・情緒的に短縮させる出来事であった。1922年に尼崎汽船部の「君が代丸」が、植民地の辺境である済州島と、宗主国日本の工業都市である大阪を結んだ後、いくつかの汽船会社が参入することで、済州島人の渡航がより容易になった。その結果、出稼ぎ渡航者は年々増加の一途をたどり、1933年には渡航者は29,208人、帰還者18,062人、1934年には両者合わせて、約5万人として、島全人口の25%に達し、しかもその8割が最も活力旺盛なる生産活動年齢者であった（榊田 1976：111）。渡航による済州島内の労働力不足は深刻であったが、送金による日本貨幣の流入のため、済州島全体の生活水準は向上された（榊田 1976：114-115）。

済州島人の渡日の結果、済州島の経済状況は、従来の自給自足の農業経済が破壊され、次第に資本主義経済システムへと転換していた。済州島と大阪をつなぐなかで生まれた「海をまたぐ生活圏」は日本敗戦後、「国境をまたぐ生活圏」（梶村 1985）に変化する。国境の線引きは済州島人の生活実態や国家観念に関係なく「野蠻」に行われる。終戦後、済州島には6万人程度の人が帰還したが、朝鮮半島の経済的困難、政治的不安によって、1946年からは日本への再渡航の動きが高まった。

しかし、1946年のGHQの指令<sup>(3)</sup>により、朝鮮人帰還者の日本への再渡航が嚴重に規制されると、既存の生活を維持するために「密航」という方法を用いて渡航を果たしていた。済州島人口の4分の1が日本での出稼ぎ経験をもっていたことは、日本経済と済州島経済が密接に結ばれていたことを表している。それが、国境という恣意的な線引きによって制限されたとしても、一度出来上がった水路はあらゆる方法を通じて非公式的に保持されるのである。

そして、済州島の4・3事件<sup>(4)</sup>と朝鮮戦争の動乱から逃れるための「密航者」も大勢存在していた。

越境する主体にとって、「密航」は命がけの「不法行為」という認識はあったものの、国境の統制管理という権力と渡り合いながら、生存を模索した実践でもあったといえる。

それでは、そもそもなぜ済州島人が出稼ぎの欲望を日本に向けているのかを考えてみよう。韓国総人口（約4800万人）に占める済州島人口（約56万人）に比べると（1%強）、在日コリアンのなかで在日済州島人が占める比率（約20%）の

高さは注目に値する<sup>(5)</sup>。この高い比率は、その後の済州島人の動きを予想させるのである。すなわち、済州島人の関心を日本へ向かわせたのは、経済的要求、政治的状況、制度的変化のみならず、済州島人と在日済州島人との交流からその端緒をみることができるのである。

そして、済州島は、地縁結合が強い地域であり<sup>(6)</sup>、共同体的な性格が強い済州島から日本へ渡っていた在日済州島人一世たちは、「自分が生まれ育った故郷であるために、(済州島を)助けるのは当たり前」という認識をもっていた。「在日済州島人のおかげで済州島が発展した」という言葉があるくらい、1960年代から在日済州島人は済州島社会に膨大な経済的支援をしてきた<sup>(7)</sup>。在日済州島人たちは道路、電気、上・下水の開設などの生活基盤助成事業もさることながら、農村改革事業、村落発展、教育、文化など多方面に寄贈と支援をしていた<sup>(8)</sup>。その痕跡として、済州島の各邑・面・里（ヨプ・ミョン・リ）の役所には在日済州島人の支援に感謝の念を表す感謝碑・功德碑が建てられている。済州島人は、自分を取り巻く済州島社会の公的な空間が在日済州島人の支援によって、発展していくことを感じていたと推定できる。当時、済州島人の認識のなかの在日済州島人は「富裕な国からきたお客さん」というイメージが強く、在日済州島人はもちろん、日本で出稼ぎ労働者として働いている人たちまで、済州島の村の人たちにとっては羨望の対象であった（ジョ 2005：93）。「村で育つときは、なんでもなかった子が密航で日本へ行って稼いだお金で、5年後、故郷で二番目に大きい畑を買った」<sup>(9)</sup>という身近で接する可視的な出来事は、済州島人の日本への出稼ぎ意欲を高めたのであろう。

また、済州島人の大半の場合、日本に家族もしくは親戚がいる。家族と親戚という個人レベルでのつながりが済州島と日本を連結させる社会的ネットワークの核心である（ユ 2000：374）。そのネットワークを通じて、物資が不足していた済州島の家庭へ日本からの食品、衣類、電子製品、薬品などが送り込まれていた。「送れるものは全部送ってあげた」という在日済州島人の証言からもわかるように、在日済州島人との関係と彼らが送っていた日本製品そして在日済州島人の寄贈による済州島社会の目に見える変化のなかで育った済州島人たちは、日本を生活世界の一部として認識するようになる。それが、済州島人のメンタリティの一部をなしたのではないだろうか。「移民送り出しのコミュニティで育つ子どもたちは、まさに同族や隣人たちの生活を通して海外で働く身体化された行動様式を身につけて成長していくのである」（佐久間 1998：161-162）。

「韓国への渡航よりも、日本への渡航を考えてしまう」という言い方を済州島人たちはよくする。済州島人たちのメンタリティからすると、「陸地」<sup>(10)</sup>の韓国と日本、その両方とも別世界である。韓国における済州島の排除の歴史が苛烈であったがゆえに、異国であった日本のほうが、移動の可能性に開かれているという状況が存在していた。国境線は一つのボーダーでしかなくて、済州島人たちは国境線ではないボーダーも感じていた。つまり、韓国社会における心理的なボーダーも感じていたのである。それに比べれば、国境というボーダーがそれほど高く

はなかったと考えられる。

1980年代からは済州島の経済発展もともない、済州島人の在日済州島人に対する物質的援助の要求は減少し、在日済州島人の特別なイメージは弱化した。また、1990年代からの日本経済の悪化と、済州島と深い絆を意識していた在日済州島人一世の数の減少に比例して、在日済州島人による寄贈も急激に減り、商業的投資に転換する傾向を見せている（ジョ 2005：96）。次第に在日済州島人と済州島人との関係が疎遠になっていくなかで、1980年代には、韓国の出入国管理制度に変化がもたらされた。1982年7月からは親戚招請による海外旅行が開始された。1985年以降、「親族訪問ビザ」<sup>(11)</sup>で合法的に渡日することが本格化した<sup>(12)</sup>。その後、1989年の「海外旅行完全自由化」<sup>(13)</sup>によって、全面的に渡日の門戸が広がっていくことになった。「海外旅行完全自由化」によって、日本に縁故がない人たちも渡日ができるようになったのである。在日済州島人とのつながりは以前より希薄になったとしても、済州島人たちの歴史性を背負ったメンタリティは、日本を身近な場所として想像させ、その想像力——とりわけ、それが集団的であるとき——が、移動という行為の足場になり、収入の増加や日本での労働への期待をめぐる諸々の観念を創造しているのである（Appadurai 1996=2004：27）。

## （2）寿町への済州島人の流入過程——潜在する個人戦略

それでは、80年代後半から横浜の寿町への韓国人の流入と集住がいかにして可能になったのかを明らかにしてみよう。その際、大阪に移住していた済州島人たちの経験と対照すると、その特徴がより鮮明になるだろう。なぜ、済州島人たちは日本において最大の在日済州島人コミュニティを形成している大阪ではなく、横浜の寿町を選択していたのか。その問いに関してはCさん（1936年生、済州島男性、1973年、1979年密航、1985年親族訪問ビザで来日、1987年から超過滞在、2001年自首帰国<sup>(14)</sup>）のインタビューからヒントを得られる。

東京などは食堂が多いからそうでもないが<sup>(15)</sup>、大阪には工場が多くて、密航できている人たちを集めてその工場で仕事させる場合が多かった。その従業員が給料の高いところへ職場を移すと、それを恨んだ前のところの雇用主が入管に告発して、摘発されて韓国へ強制送還されることがよくあったよ。同じ済州島人であるとしても密告されて捕まった。[Cさんとのインタビューは2009／8／8、8／10の計2回、済州市のCさんの職場で。その2回目より]

以上の語りに加えて、Cさんは、「密告されて帰国させられた済州島人たちが再び密航船に乗り、水を抜いた水タンクに隠れていたとき、彼らが隠れているの知らない船員が水タンクに水を入れてしまったため、密航者たちは溺死した。その死体は6ヶ月後発見される。死体は水にふやけていて、その形体からでは誰

だかわからず、着ている洋服でやっと判断できた」ことを語ってくれた。

この密航船事件の記憶は、密航に伴う危険性とともに、在日済州島人がビザをもっている雇用主であることに対して、密航によって日本に渡っていた済州島人たちは、彼らに雇用されていたビザをもっていない「非合法」的な存在であったことを喚起させる。そのため、その事件は、不均衡な関係性がもたらした結果であると認識される。「済州島の出身者が多数を占める『密航者』は、目的地にたどり着くと、在日一世のもとで仕事を習い、技術を覚え、日本社会に適応していった。『トウロク』がない限り、『密航者』の生活は不安定極まりないものであったが、猪飼野という『済州島の街』は、そうした『密航者』が日本生活に慣れていく絶好の場所であった」と玄（2007：170）が指摘するように、大阪は、新たに来日する済州島人にとっては、移住労働の足場になる場所という側面はもっていたが、濃密な人間関係が作り出す不自由さと、立場の不平等性がもたらす理不尽さを我慢させていた側面も否めない。そういった関係性のなかで、移住者たちはしたたかに生きていたのである。

日本に親戚がいるにもかかわらず、それを頼って行く選択をしないで、「関係が疎遠になり、顔もよくわからない親戚のところへは行きたくなかったから、（在日の親戚の）連絡先を知っていたが、その連絡先を記入したメモはもっていかなかった」<sup>(6)</sup>と語るYさん（1949年生、済州島男性、1988年来日、2005年強制送還）は、本堂神父が渡してくれた鹿児島県の住所だけをもって来日を敢行したが、釜山国際空港でまたいとこに出くわす。

大阪に住んでいたまたいとこは済州島にゴルフをしに行って帰るところで、私になぜ日本へ行くのかを聞いた。働きに行くと言えど、どこかつてがあるのかと聞いてきたので、つてはないが、神父様が鹿児島にいる知り合いを紹介してくれたので、そこでも行こうかと思っていますと言った。そうしたら、またいとこは、鹿児島へ行っても仕事はないし、すぐ捕まるって。田舎は、外国人が行くと、警察にすぐ申告するから行かないほうがいいと言われた。…（またいとこ）タクシーに乗って大阪空港から市内へ向ったが、料金が1万5千円くらいだった。私は今もその言葉を忘れないんだ。とても気分が悪かった。またいとこは、私に「君らはタクシーに乗れない」と言うのだ。その当時、私は39歳だったが、「はい」と答えるしかなかった。あとで、うちの母に電話して、タクシーに乗せてもらったから、西帰浦に住んでいるまたいとこのお母さんに真鯛でも送ってあげてくださいと頼んだ。私はその言葉をいまだに忘れてないんだ。その言葉はお金もない君みたいなやつはタクシーのようなものには乗れないという意味だった。[Yさんとのインタビューは2009／8／7の計1回。済州島朝天邑新村里のYさんの自宅で。そのインタビューより]

Yさんのインタビューからは、済州島人と彼らの在日の親戚との距離感を感じられる。「君らはタクシーに乗れない」というまたいとこの発言に、「はい」としか答えられなかったYさんは、「真鯛」を送ることで、害された自分のプライドを回復させようとしたと思われる。済州島人と在日済州島人との非均衡な関係は、在日の親戚が移住における完璧な味方であるとは必ずしも思わない傾向を作りに出していたと判断できる。

また、筆者が行ってきた寿町居住経験者へのインタビューにおいては、90年代は「大阪は取締りが厳しくて、街を歩くのも危なかった」反面、「寿町は警察の介入をほとんどうけない」ため、韓国人の間では自由で安全な場所となりつつあったという指摘も確認できる。

韓国人たちにとって寿町は、在日コリアンとの関係をお互い負担にならない程度に維持できる場所および、ホスト社会の公権力からも比較的自由な場所として、認識されていた。そのため、新たに来日する済州島人たちは、寿町は比較的自由で安全な場所で経済活動ができる格好の場所として理解していたと推察できる。

それでは、済州島人たちがいかなる方法によって、寿町に流入したのかをみてみよう。

Kさん（1944年生、済州島男性、1988年来日、1994年から超過滞在、2009年強制送還）は寿町への移住過程を振り返り、インタビューにおいて次のようなことを教えてくれた。済州島人の寿町への流入は、在日済州島人とのネットワークから、そして寿町に先入した済州島人と済州島にいる人たちまたは他地域にいる済州島人とのネットワークによって広がっていた。この時期においては、在日済州島人が新たに流入する済州島人の仕事と宿泊の面倒を直接みることは少なくなり、日本入国審査を通過できる情報源の提供者の役割を果たしていた。

ここに僑胞<sup>(17)</sup>がいるから、最初にその僑胞を訪問することにして、（入国カードに）その家の電話番号を書いて、予めこういうふうにつながするんだ。

「私はいつ行くから、もし（入国管理局などから）連絡があったら、私がここにくる予定だと言ってください…」というふうに事前に口あわせする必要がある。[Kさんとのインタビューは2008/10/25、2009/7/2の計2回、いずれもKさんの寿町の自宅、その2回目より]

Kさんの「親戚は大阪のほうにたくさんいる」そうだが、決して近いとはいえない間柄である「友人の姉の舅である僑胞」の援助により上記の手順で日本入国をはたしていた。その後、短期滞在ビザで、済州島と寿町を行き来していたKさんは、ビザの再発行のために済州島に戻って、寿町に帰ってくるたびに、他の済州島人と一緒に入ってきた。



88年以降、90年くらいまで寿町には部屋がなかったです。すごく小さな部屋（3畳程度）で3人、4人も雑魚寝していました。韓国人で（寿町の簡易宿泊所は）いっぱいになっていました。私が韓国に帰るたびに、多くの済州島人から自分を寿町につれて行くように頼まれました。また、寿町にきている人から「うちのお兄さんをつれてきてください」など頼まれて、7人もいっしょにつれてきたこともあります。[1回目のインタビュー、2008/10/25より]

その当時、「済州島では日本へ行くのがブームであった」<sup>(18)</sup>。日本での出稼ぎの具体的な場所として寿町が済州島の人びとには知られていた。それが大きい流れをつくり、寿町における済州島人の人口はあっという間に増えて、90年代初頭は寿町人口の約6分の1を占めるに至っていた。済州島出身者ではない韓国人労働者Hさん（1954年生、ソウル在住の全羅南道男性、1990年来日・超過滞在、1996年から寿在住）のインタビューからは、済州島人の移住システムの独自性をうかがうことができる。

私は、日本で出稼ぎをするためにブローカーにお金を払ったが、済州島人の場合はそういうのがなかった。その当時、済州島人たちはよく行き来していたから、みんな、位置とか情報とか把握していて、書類（パスポートとビザのことをさす）だけ作って入る。ソウルの人たちはそんなこと全然わからなくて、ブローカーの話だけ聞いて入ってくる。日本へ行くとお金をたくさん稼げるし、仕事も斡旋すると言われて、ブローカーにお金を払う。私たちは入ってから、いろんな現場で、いろんな人たちと話をしてから、もっとお金をくれるところに移る。…済州島人たちはほとんどが（直接に）横浜寿町に入ってくる。他地域の人たちはこない。なぜかというところからわからないから。そのうち、人件費が高いという寿町の話を書いて（他地域出身の韓国人たちも）寿町に入ってくる。[Hさんとのインタビューは2008/10/7、10/31、11/2、2009/7/2、9/12の計5回、川崎の労働組合事務所と寿町総合労働福祉会館で。その4回目より]

Hさんは、自分の移住経路と比較しながら、済州島人たちが他地域出身者より、移住において有利な立場であったことを指摘する。「済州島人たちはよく行き来していたから」、移住にかかわる情報はより容易に流れ、入手できていた。Hさんの語りからは、人脈と情報をもっていた済州島人たちは、寿町での生活においてイニシアチブをとっていたことがうかがえる。

以上のように、寿町への済州島及び他地域からの韓国人たちの移住経験について概観したが、そこからは彼らを取り巻く社会的な状況の多岐にわたるリアリティが浮き彫りになると同時に、彼らが個々の選択において移住というものを遂行

してきたことが示唆される。

社会状況と、個々の多様な選択肢、意図、意味づけが見えてくるなかで、個人は移動していくにあたって、それぞれの創発的な工夫に基づいた選択を行っている。そうした個々の戦略性は、移住先での日常生活を立ち上げていくなかで、より鮮明なものになっている。

#### 4. 寿町で生きる済州島人の個人戦略——「韓国人親方」中心の就労構造

寄せ場労働者は手配師<sup>(19)</sup>や人夫出しから仕事を斡旋される。彼らの就労形態は、朝に雇われて夕方に賃金をもらう日々の日雇すなわち「現金」型就労（寄せ場労働者の就労の基本形態）と、一定期日を決めて雇用される期間雇用すなわち「契約」型就労である。期間雇用の場合はさらに、自分の居所（たとえばドヤ）から仕事の現場へ直接に通う「直行」型就労と、人夫出し飯場や工事現場の飯場、ホテルに泊り込んで就労する「出張」型就労がある。寄せ場労働者の就労状況は、期間雇用を含めて、いずれも日雇という就労の不規則性・臨時性が不可避であり、その結果、生活の低位性・不安定性を免れることができない（青木 2000：30）。寿町に入ってきた韓国人労働者も寄せ場の就労形態に収斂されていくが、寿町の韓国人労働者の場合のほとんどが、手配師の性格を濃厚にもつ「韓国人親方」の下に再編成されていた。Kさんは「韓国人親方」を次のように理解していた。

親方というのは、もし今日仕事があるでしょう。会社から何人かつれてく  
ると言われると、責任をもって、人数を用意する人を親方だという。親  
方はほとんどが済州島人だよ。早くからここを根拠地として定着していたか  
ら。それで、また後で入ってきた人たちのなかで親しい人にバトンを渡して  
いる。[2回目のインタビュー2009／7／2より]

Kさんのインタビューからも示されるが、「韓国人親方」と言われている圧倒的多数が済州島人である。ただ、「日本人親方」との比較で「韓国人親方」と呼ばれているが、その意味するところは、「済州島人親方」である<sup>(20)</sup>。「済州島人親方」は80年代後半の済州島人の寿町への大挙流入以前に、密航によって来日し、より早い段階に寿町に定着して、寄せ場とそれを取り巻く労働市場について一定の知識、情報そして人間関係をもっている人たちであった。彼らの寿町における社会資源は、彼らに既得権と寿町において優越な地位とを与えていた。この優越な地位は、金銭を媒介して受け継がれていた。

「韓国人親方」とその他の韓国人労働者との関係はGさん（1958年生、済州島男性、1991年来日、2008年強制送還）のインタビューから明らかにされる。Gさんは、来日まもなく、寿町で「韓国人親方」をやっている中学校の同級生に偶然

に会って、仕事に誘われて行くことになる。その現場では明日もくるように言われて、翌朝、約束時間に集合場所へ行ってみると、同級生は目も合わさずに、一時間早く出てこなかったから他の人を入れたと言ったのである。このことを不思議に思っていたGさんは近所の人にこのことを聞いてみたところ、以下のような寿町の「韓国人親方」システムを知ることになる。

近所の人たちが、「お前、（仕事から）帰ってきたときに缶ビールでも（韓国人親方に）おごったのか」と聞かれて、「一日行って、ずっと仕事が決まったわけでもないし、その現場で直接に明日もくるようにと言われたのに、なぜ缶ビールをおごらなくちゃいけないの?」というふうに言ったら、「寿町は全部そういう仕組みになっている。わいろのようなものを継続して入れてあげると、仕事へ行けるけど」と言われた。…私はその仕組みを知らなかった。何かおごらないと、自分ははずされ、他の人をつれて行くということ。[Gさんとのインタビューは2009/8/8の計1回。済州島の自宅。そのインタビューより]

Gさんは中学校の同級生である「韓国人親方」との関係を、最初は相互扶助的な関係として想像していたが、実際には仕事の周旋との交換で対価を支払わなければならないという商業的な関係が成立していたことを確認するとき戸惑いを隠せなかった。それは、自分が済州島では想像したことのない、寿町という世界の掟であった。その後、Gさんは親戚と3年間、船仕事をしに行くが、そこでの勤務のため、その親戚に紹介費の名目で3ヵ月ごとに5万円払っていたという。血縁関係にあるとしても、寿町での仕事の斡旋においては、対価を支払うのが寿町のルールであった。自分たちより先に寿町に参入して、日本人との仕事の人脈を形成していた「韓国人親方」たちの仕事ネットワークに金銭の支払いによって、仕事を提供されることは、自らの力でネットワークを持ち込めない人たちにとっては、気楽な仕組みであったという側面は否定できない。しかし、Gさんの仕事の腕前はけっこう評判だったらしく、自分の実力と労働組合の助力で親戚の「韓国人親方」とは決別し、職場に直接雇用され、2008年5月のある早朝、出勤のため通過している鶴見駅で取締を受けるときまで、ずっと働いた。また、Gさんの妻であるBさん（1960年生、済州島女性、1991年来日、2000年自首帰国）は、寿町は「ヤクザなみの無許可職業紹介所」のようなところであると表現していた。1994年頃、友達の紹介で石川町の駅前にあるラブホテルで就職するが、ヤクザと同棲している済州島女性に「ここは自分の管轄下であるから、お金を払うように」と強要された。

もし、お金を払わないと、ホテルのオーナーに言いつけて、あなたを首にさせるって。そして、自分はヤクザとつながっていることを理由として脅し

てきた。結局、そこで働くために、その女性にはお金をあげるしかなかった。  
[Bさんとのインタビューは2009／8／18の計1回。ソウルのBさんの自宅  
付近の喫茶店で。そのインタビューより]

夫であるGさんの場合、「韓国人親方」との関係を解除した経験があったにもかかわらず、Bさんの場合は、別に仕事を斡旋されなくても、寿町付近の職場で、彼女の縄張りのなかで仕事するために「6ヶ月ごとに3万円ずつ彼女に支払った」という、無茶な要求に応じていた。Gさんの場合は、職場が寿町の外部にあって、韓国人労働者が少ない現場であったからこそ、独立が実現したと思われるが、妻Bさんの場合は、仕事と生活の領域をともにする寿町で顔を合わせて日々の生活を営んでいかなければならない状況において、そこで暮らすための一種の「住民税」として定期的にお金を払っていたかもしれない。しかし、Bさんは1年後、友人の紹介によって寿町付近の別のラブホテルへ転職し、その女性にお金を支払うことをやめる。この事例からは、「非正規滞在者」の済州島人が寿町で生きていくための妥協と克服、そして彼（女）らなりの合理的判断に基づく生活戦略の遂行が垣間見える。このような出来事は済州島人の内部ではよりよくみられたが、他地域出身の韓国人たちはそのシステムに完全には包摂されていなかったことをIさん（1966年生、忠清道男性、1988年来日、1993年自首帰国）のインタビューから確認できる。

親しくなると対人関係もよかったし、その人たち（；「済州島人親方」）が私にそういうの（；仕事の紹介費を払うこと）を要求することはなかった。しかし、済州島人たちはそういうのができた。その人たちで固まっていたから。その人たちはその縄張りのなかで、その人たちだけで仕事へ行く。他地方の人たちはつれて行かないで、済州島人だけで行く。寿町では済州島人たちは陸地の人たちとは区分されていた。…済州島人とは一緒に遊べなかった。その縄張りですべて、陸地の人たちは入れてくれなかった。

寿町で生活をしていてIさんは、済州島人コミュニティにおける紹介費のやりとりを「その人たちで固まっていたから」可能であったと指摘する。済州島人コミュニティの閉鎖性は「韓国人親方システム」を維持させる役割をはたしていた。

加えて、Kさんは済州島人中心の就労形態をとるしかなかった理由を言及してくれた。

仕事の基盤があって、誰でもつれて行って仕事させることはできない。その仕事に慣れていないと、全員の仕事に支障を与える。最初にここに来て仕事に入ったのが済州島人であるから、済州島人のほうが熟練しているし、日

本人親方も「韓国人親方」に他の韓国人労働者を任せると、「韓国人親方」が仕事の指示を全部行うから、仕事が効率的に行われた。ある日、私は全羅北道の人を仕事につれて行ったら、その人は休みの時間に私にこういうのだ。「私は日本語習う前に済州島の方言を習わないといけません」って。それくらい、一緒に仕事へ行くと、済州島の言葉を使うから、陸地の人たちは済州島の言葉わからないから。[1回目のインタビュー2008/10/25より]

Kさんは済州島人同士の仕事現場においては、技術とコミュニケーションの上昇を促し、効率のよい仕事ができることを指摘している。同一の国籍をもつとしても、言語（済州島の言葉）が通じないことは、済州島人と他地域の韓国人との間を言語に焦点化された境界をつくっているようにみえる。しかし、日本人との仕事では日本語をわからなくても「見まね、手まねでやればいい」という移住労働の基本的な心得が通用するのにもかかわらず、済州島人と他地域出身の韓国人労働者の場合はなぜ言語が障壁になって現れるのか。寿町における「韓国人親方システム」を維持させるための、統制と依存関係を保つには、言語による線引き、排除が最も有効に作用していたのではないだろうか。つまり、個々人の過去をわかり、アイデンティファイできる領域として、済州島人コミュニティに就労と生活のあり方を限定することこそが、「韓国人親方システム」を支えていたと判断できる。

ところが、寿町の仕事量が減り、済州島人の帰還も増加していくにつれて、済州島人コミュニティではなく、韓国人コミュニティとしての助け合いが必要になったことをKさんは言及する。

今は人も少ないし、韓国人であるならば、ソウルであろうとも、釜山であろうとも、韓国人が日本にきたら、みんなで力を合わせて助け合うという心をもつべきだ。…（しかし、）済州島人の縄張り意識はなくなったとはいえないけどね。[2回目のインタビュー2009/7/2より]

Kさんは日本の景気が悪くなり、済州島人の数が減少していくなかで、済州島人を中心としたコミュニティが他地域の韓国人にも広がっていたことを指摘する。仕事の確保と多数の済州島人の存在が必要条件であった「韓国人親方システム」は、済州島人コミュニティが縮小していくなかで、全盛期のように維持できなくなったことも推定できる。しかし、Kさんの語りから、いまだに寿町の中心にいるのは、済州島人であることもうかがえる。

## 5. 結語

寿町では1980年代以降に来日した済州島人によって、就労構造が確立されてい

た。この就労構造の中心をなすのが「韓国人親方システム」であった。「韓国人親方システム」とは、主に済州島人親方から成り立つ就労斡旋システムである。その親方システムはピンはね、紹介費、わいろなどを要求するシステムでもあったが、済州島人はそれを単なる抑圧としてはとらえていなかった。人々は個人戦略のもと、不安定な状況において日々の生活を成り立たせるために必要なコストとして認識していた。その結果として、エスニック・ネットワークをある程度保持しながら、より自由に就労と生活ができる場所として寿町という場所が作りだされた。この特色が、寿町に固有の「移住を支える社会的ネットワーク」を成立させ、その具体的な形として済州島人のエスニック・コミュニティをつくり出したのである。

その過程をみることによって、エスニック・コミュニティというものを、個々人が生きていくうえで、さまざまな戦略や狡知がせめぎ合う場として理解し直すことができるのである。マクロな社会システムに翻弄される存在である寄せ場「寿町」の済州島人たちが、現実を受容しながら、実践していく過程を考察することにより、エスニック・コミュニティの内実がより明確にされるのである。

同時に、ある種の構造的に規定された場——寿町も周縁であり、済州島も周縁である——における人々の排除を受容するなかで、生活をつくりあげていく実践がみえてくる。それはまさに、構造的な劣位者たちが行う、排除の受容を前提とした対抗的な実践をみていくことにつながるのではないだろうか。

#### 〔注〕

- (1) 「非正規滞在者」とは、合法的な滞在資格をもたずに主権国家の領土内に滞在する外国人を指す。本稿では、「超過滞在者」と「非合法上陸者」を含む表現として使用する。
- (2) この時期をもって、近代工業労働者としての済州島人の日本渡航が開始されたといえる（杵田 1976：108-109）。
- (3) GHQが指令した1946年3月16日付の「引き揚げに関する覚書」、それに続く4月2日付の「日本人以外の入国及び登録に関する覚書」には、「進駐軍に属しない日本人以外の国民は日本への入国について連合国最高司令官の許可を受けることが必要である」とされた（玄 2007：165）。
- (4) 『済州四・三事件真相調査報告書』によると、済州4・3事件とは、1948年4月3日から、1954年9月21日までに済州島で起きた、5・10総選挙に反対する市民抗争とそれに対する韓国軍の流血鎮圧のことである。この事件は、南朝鮮単独政府樹立を意味する5・10総選挙に反対するために始まったが、朝鮮戦争が終わるまで続いた。この間約2万5千～3万人の済州島人が虐殺された。そのなかには、武装隊によって犠牲になった人も含まれるが、ほとんどは、極右団体と軍警討伐隊による犠牲者であった。また、大阪市生野区には、1948年以降、済州島の虐殺から逃げて「密航」で入ってきた人たちが3万人に及ぶと

- いう（ハンギョレ21（韓国の時事週刊誌），2008年4月8日付）。
- (5) 在日コリアンの約半分を占めているのは、慶尚道出身者であるが、それをつてにしての慶尚道民の渡日は済州島人ほどの勢いではなかった。
  - (6) 筆者とある在日済州島人との対話から、済州島人同士の共同体的な性格が視える。「私は釜山出身ですが、日本で同じ釜山出身者に会うと少しうれいです。済州島人同士もそうですか？」という筆者の質問に、彼女は、「それとは全然違う。全然知らない済州島人に出会ったときもまるで親戚に会ったようなものなんだ。」と答えて、済州島人には、他地域の人たちは想像しがたい格別な関係性をもっていることを教えてくれた。
  - (7) 在日済州島人の済州島への寄付と投資は、済州道政からの要請によるものでもあった。
  - (8) 1960年代から1990年までの寄贈実績のなかで、済州特別自治島と市郡教育庁などの機関が把握したものを整理した「愛郷のしるし——在日同胞寄贈実績」、『愛郷のしるし——100万済州人とともに21世紀へ』、『在日本済州島民会』、『在日本済州開発協会』、『愛郷無限』などには、総計6054件の在日済州島人の寄贈実績がまとめられている。
  - (9) 済州島舊左邑金寧里出身の男性（1936年生）の語りから（2009年8月10日、済州島にて）。
  - (10) ここでいう「陸地」とは、島である済州島と対比して、韓国におけるその他の地域を指す言葉である。
  - (11) 日本においては、「親族訪問ビザ」の取得が可能になる制度的な整備は次のように行われた。1967年7月20—21日、「日本国に居住する大韓民国国民の法的地位及び待遇に関する日本国と大韓民国政府との間の協定」の実施に関して、東京で、日韓両国政府関係事務者会議が行われた。同会議において了解された事項は、同年8月23日、田中伊三法務大臣と大韓民国外務部長官代理金永周外務部次官との会談で確認され、これを実施することとされた。この了解（確認）の中に、親族訪問の件と関わる事項がある。「5. 協定永住の配偶者及び扶養を要する未成年の子が同居のために日本国に入国しようとする場合には、家族構成その他の事情が勘案され、好意的に考慮される。協定永住の親、子、兄弟が一時訪問のために日本国に入国しようとする場合は、その入国が認められ、入国後はその在留期間の更新が好意的に考慮される」（法務省入国管理局編1981：292-293）。
  - (12) 「密航」ではなく、堂々と「親族訪問ビザ（韓国では、招請ビザと呼ばれていた）」で日本へ渡る人たちが村人たちにうらやましく思われていたことは想像に難くない。付け加えると、筆者のインフォーマントのなかで「親族訪問ビザ」による訪問者は、一人（1982年渡日）を除いて、1985年以降に渡日していた。
  - (13) 韓国政府の海外旅行に関する規制は、1980年代から次第に緩和されていく。

1983年からは、50歳以上の国民には観光旅券を発給し、韓国人の観光目的の海外旅行が史上最初に認められる。1987年9月16日からは、45歳以上の海外旅行自由化を行い、海外旅行者に賦課していた「観光預置金制度」と3ヵ月以内に帰国するという「帰国契約書」を廃止することにより、海外旅行許可条件が緩和された。1988年には、海外旅行許可年齢が40歳に下がり、1989年からは、年齢制限がなくなり、海外旅行完全自由化がなされる（キム 1990）。

- (14) 本稿において、自首帰国というのは、非正規滞在者が自ら入国管理局に出頭し合法的な手続きをとって、帰国することをさす。
- (15) Cさんは大阪の工場との比較として、「東京などには食堂が多いからそうでもない」と述べているが、食堂が表すものは、店と店との距離のことである。韓国食堂が密集しているところも、いくつかあるが、ここで、彼が表現しようとしたのは、食堂は離れているため、もし、店員がそこをやめて、別の食堂に移ったとしても、それほど問題にはならなかったということである。
- (16) 済州島西帰浦出身の男性（1949年生）の語りから（2009年8月7日、済州島にて）。
- (17) 僑胞という表現は郷里を離れて旅をする人、もしくは、旅人のようなさまを表す僑の字を利用し、海外に住んでいる同胞を指す別のことばである。以前、韓国政府の僑胞及び僑民という表現により、とくに日本においては同胞という言葉が北朝鮮においてのみ使われる言葉として一部認識されたこともあるが、現在は韓国政府及び同胞社会の言論などにおいて公式的に在外同胞、同胞社会、韓人同胞などの表現を使用している。
- (18) 済州島翰林面新倉里出身の女性（1961年生）の語りから（2009年8月9日、済州島にて）。
- (19) 手配師とは、労働者を調整し、彼らを送り込むことによって、親方と企業側などから手数料をとる業者をさす。というものの、親方のなかから手配師となるものも現れた。済州島舊左邑金寧里出身の男性（1936年生）の語りから（2009年8月10日、済州島にて）。
- (20) 現時点において、「韓国人親方」は主に船仕事においてみられる現象である。

〔参考文献〕＊は、韓国語文献

青木秀男，2000，『現代日本の都市下層一寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店

Appadurai, Arjun, 1996 *Modernity at Large*, Minneapolis: University of Minnesota Press. (=2004, 門田健一訳『さまよえる近代』平凡社)

玄武岩，2007，「密航・大村収容所・済州島——大阪と済州島を結ぶ『密航』のネットワーク」『現代思想』35巻7号，158-173

樋口直人，1999，「個人戦略とエスニシティ」『一橋論叢』121巻2号，338-352  
——2002，「国際移民の組織的基盤——移住システム論の意義と課題」『ソシオ



ロジ』第47巻2号(145号), 55-71

法務省入国管理局編, 1981, 『出入国管理の回顧と展望——入管発足30周年を記念して』

\*ジョソンユン, 2005, 「済州島に流入された日本宗教と在日僑胞の役割」タムラ文化研究所『タムラ文化』第27号, 83-96

梶村秀樹, 1985, 「定住外国人としての在日朝鮮人」『思想』734巻, 23-37

\*キムヨンジン, 1990, 「海外旅行自由化以後の海外旅行盛行に対する研究——ソウル地域を中心として」慶熙大学校経営大学院修士論文

高鮮徽, 1998, 『20世紀の滞日済州島人——その生活過程と意識』明石書店

枅田一二, 1976, 『枅田一二地理学論文集』弘詢社

西澤晃彦, 1995, 『隠蔽された外部——都市下層のエスノグラフィ』彩流社

佐久間孝正, 1998, 『変貌する他民族国家イギリス——「多文化」と「多分化」にゆれる教育』明石書店

\*ユチョルイン, 2000, 「済州人たちの生活世界における日本」韓国文化人類学会『韓国文化人類学』第33巻2号, 361-378

〔参考雑誌〕\*は, 韓国語文献

\*ハンギョレ新聞社「ハンギョレ21(韓国の時事週刊誌)」2008年4月8日付